

新潟県・燕市

信濃川大河津資料館

—市民から専門家までも惹きつける河川技術の展示—

亀谷一洋 編集委員

大河津分水路は1909(明治42)年より本格的な工事に着手し、1922(大正11)年に通水した延長約10kmの人工水路である。信濃川の度重なる氾濫から越後平野に住む人たちの人命と財産を守るため、江戸時代から多くの地元住民が建設運動を繰り返し、河川技術者が真摯に工事に取り組み、この分水路が完成した。この分水路は、今日の越後平野の良質な農地や都市機能の発展に大きな役割を果たしている。

今回筆者が訪れた信濃川大河津資料館は、1978年10月に開館し、2002年4月にリニューアルオープンした、大河津分水の歴史と役割に「出会い」「学ぶ」「極める」「ふれる」ことを目的とした資料館である。資料館のすぐそばには、2002年に国の登録有形文化財となった旧洗堰をはじめ新洗堰、可動堰、固定堰などがあり、実物を間近に見ることができるとも大きな特徴となっている。

筆者が特に興味をもったのは、資料館2階の大河津分水を支えた技術の展示である。なかでも、1927年の自在堰陥没の後を受けて赴任した宮本武之輔氏が指揮を執り、つくったとされる可動堰模型は、当時現場責任者の宮本氏の豊かな発想が垣間みられ見入ってしまった。模型の精巧さもすばらしいが、堰の基礎部分が確認できるような模型をつくるという発想は、やはり後世に名を残す土木技術者であったと感じた。ほかに日本初のべ

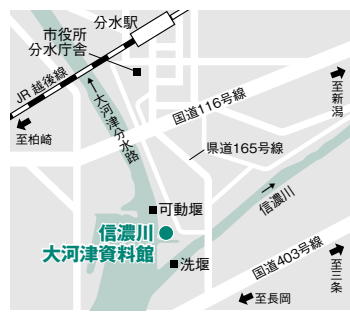
Access アクセス

所在地 〒959-0124 新潟県燕市五千石

電話 0256-97-2195

入場料 無料

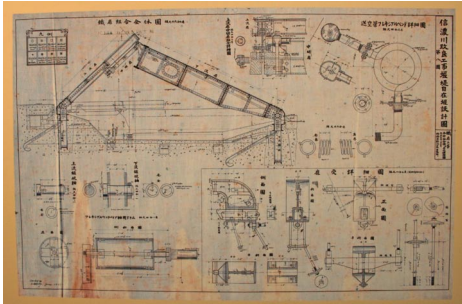
開館 9:00～16:00

休館日 毎週月曜日、12月29日～1月3日
(月曜日が休日のときは開館し、休日明けの平日が休館日)交通 ○鉄道：JR越後線「分水駅」から車で約5分
新幹線「燕三条駅」から車で約20分
○バス：越後交通「公園入口」バス停下車徒歩約10分○自動車
北陸自動車道中之島見附I.C.から約20分
北陸自動車道三条燕I.C.から約20分URL <http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/ohkouzu/>

ア・トラップ式自在堰を設計した岡部三郎氏の当時の図面や原理をわかりやすく説明している模型などもあり、河川を専門としない技術者でも楽しめる内容となっている。河川専門技術者は館内随所に展示している当時の図面や資料などを見て専門知識を高めるのめいと感じた。

確井陽一館長(取材当時)のお話では、この資料館は地域の人びととの共存で成り立っていて、年間4000人の小学生が社会科学学習などである。信濃川大河津資料館友の会もあり、これからも地域とともに歩いていく資料館でありたいと熱く語っていた。なお、これからの季節は白鳥が親子で飛来する姿も見られるという。

車の場合は、資料館から分水路河口まで約10kmをドライブし、河口に近づくほど水路幅が狭くなる本分水路の特徴や分水機能維持のため、減勢工に設けるブロック状の構造物バツルピアを備えた、河川の洗堀を防ぐための工作物としての第二床固とこがたもあわせて見学することをお勧めする。



ベア・トラップゲート設計図(岡部氏設計)



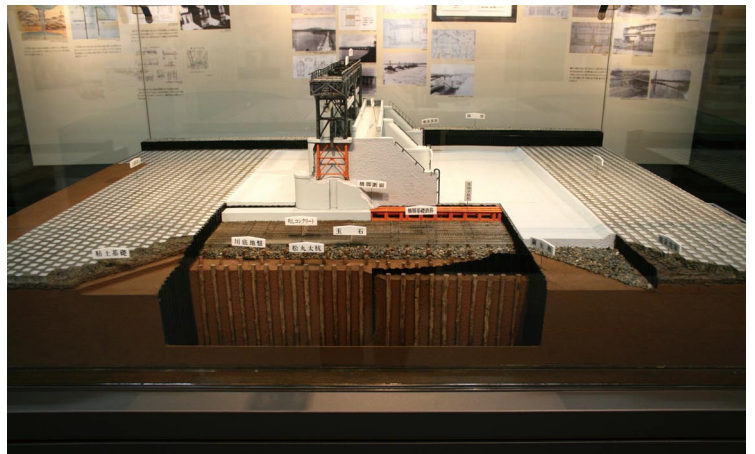
信濃川大河津資料館の建物



ベア・トラップゲートの原理模型



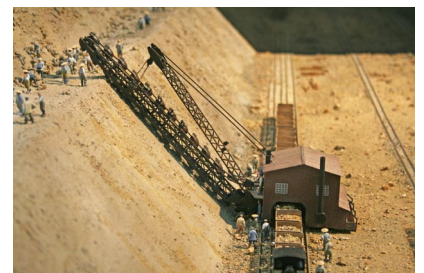
分岐点付近ジオラマ模型(上へ:大河津分水路、右側:信濃川)



宮本武之輔が指揮し制作した可動堰模型



分水路河口付近にある第二床固とバフルピア



河口付近の山間部で使用した土工機械エキスカベーター(掘削機)模型



2000(平成12)年出土の分水路工事に使われた鍋ト口(土運搬車)